



(56.0cm×162.2cm)

# 「大山南壁」

三橋 健 (大正14年入学)

作者の三橋健は倉敷市出身です。父の三橋玉見は医者でしたが、詩歌や書画、陶芸をたしなむ文化人で、大原孫三郎に招かれるかちで倉敷市に診療所を開業したそうです。父の影響もあり、幼い頃から画家を志した健は東京美術学校（現在の東京芸術大学）へ進学しました。昭和14年父の病没に伴い帰省し、その後は大原農業研究所に助手として勤務する傍ら画家として活動し、大原美術館の美術品収集においても尽力しました。

この作品は昭和63年の創立114周年記念特別展「三橋健 洋画展」が開催された際に「遺族から寄贈されたもので、鬼女台あたりから見た大山の風景を描いています。奥様のお話によれば、大原農研に勤務されていた頃、度々大山へ登山されていたとのこと。

【蜂谷智（昭和53年卒）】

展示場所／図書館



(80.3cm×100cm)

# 「八月」

大倉 道昌 (昭和19年卒)

時は8月、真夏の太陽が照りつけ入道雲が顔をみせる。蝉が力の限り鳴いている。私は、綱を構えてその瞬間を狙う。「とれるかな」心臓が鼓動を打つ。そんな情景が鮮やかに浮かぶ。私の夏の日の思い出だ。

大倉道昌氏は、大正14年生れ、昭和19年岡山一中を卒業し、東京美術学校（現在の東京芸術大学）を終えて、画家となった。「八月」は、昭和33年、大倉氏33才の作品である。太陽の照りつける真夏、2人の小学生が、虫とりに夢中になっている姿が見事に描かれている。色彩、構図、子どもの姿など、私はこの作品に吸い寄せられる。大倉氏は、子どもの心を持ち続けている天真爛漫な人だろ

う。大倉氏は、現在85才。パリの生活や地方の風景に魅せられて渡仏し、滞在は46年におよぶ。平成17年11月には、母校創立131周年記念特別展にて、同氏の作品が展示された。「八月」は、図書館で勉強や読書に勤しむ生徒らの青春の息吹きを感じながら、今も輝きを放っている。

【秋山義信（昭和44年卒）】



(148.5cm×88.5cm)

# 「漣」

金谷 朱尾子 (薫子) (昭和47年卒)

一度観ると忘れられない。日本画家金谷朱尾子さんが描く鮮烈な色彩世界はまさに、情念の世界だ。「漣」の少女の射るような目線の先に、もし自分自身があるとしたら見透かされるだろうと思った。28歳の若さで日展特選に輝き、優れた作品を残し、51歳で早すぎる生涯を閉じた彼女は朝日高が誇れる芸術家の一人である。

朝日高在学中は文学部に属し、世界文学全集を読破する文学少女で、詩や短歌の創作にも情熱をそそいだ。「題名が決まれば絵はできあがる」と自身が述べられたように彼女の文学性は絵画制作に大きな役割を果たした。京都市立芸術大学卒業後は岡山に戻り、日展で初入選。76年「山陰の海鳥賊釣りの頃」である。更に青踏社で学び、81年に塔を背景にした3人の女性像「塔と人とうつろいと」で特選に輝く。以後、絵を描きたいという思いと「画壇的なもの」のしがらみに葛藤する。秦恒平の小説「慈子（あつこ）」からとった「慈子の風景」シリーズの装飾性は更なる豊かな可能性を感じさせた。

さて、校内に寄贈された「漣」は人生で一番多感な高校生にはどう映るのだろうか？進学、人生に悩ま多き在校生が対峙する作品としても意味があると思う。

【橋本アリサ（昭和54年卒）】



展示場所／北校舎